

フィギュアスケートともの

—ものからみた技術と感覚—

Figure Skating and Objects: Viewing techniques and
sensations in terms of objects

荒川 祐有

キーワード：フィギュアスケート, もの, 身体感覚, 参与観察, プロセス分析

This paper examines the influence of ice skating boots and blades, as things used in figure skating, on the movements and techniques of skating and jumping from the viewpoint of sensation.

For many sports, “object” are very important because it’s treated as part of the body.

The boots used in figure skating are special and have blades on the outsole. I use my experience as a figure skater to clarify how the change in “object” affect the skating and technique. Through the fieldwork, I record the changes of sensation on the ice in words.

The fieldwork was conducted at KOSÈ Shin Yokohama Skate Center, my practice site, using myself as a subject.

From the practice observation records, I wrote the episode when the boots and blades were changed. This makes it easy to put sensations into words when something “unusual” happened. It will be an opportunity to pay attention to “object”.

The record used in this case describes a change of boots and blades, a

change of blades only, and a change of boots only. The process of making these changes is shown in the original table. Then I analyzed how cognition was created.

The analysis showed that “objects” influence the senses. In figure skating, it was found that the blades, a feature of the boots, have a significant effect on the sensation of sliding and technique, especially for jumping sensation.

目次

はじめに

I 先行研究

- 1 もの研究
- 2 スポーツともの
- 3 フィギュアスケートともの
- 4 フィギュアスケートと靴

II スケート靴について

- 1 スケート靴
- 2 靴紐
- 3 ブレード

III 参与観察

- 1 フィールド概要
- 2 靴&ブレードの変更
- 3 ブレードの再変更
- 4 靴との再調和

IV 分析・考察

- 1 認知生成プロセス分析
- 2 相性
- 3 主役はものではなく人

V 結論

注
参考文献
図
資料

はじめに

フィギュアスケートは、オリンピックでメダリストが続出するほど、世界トップレベルの日本人選手が増え、マスコミで取り上げられる機会も多くなり、日本の一般の人々にもよく知られたスポーツとなった。しかし、依然実践者は少ない。そのため、その特徴はあまり明らかにされていない。本論では、フィギュアスケート競技者として、ものとしての靴とブレードを対象とし、感覚という観点から、滑る、跳ぶという動作、技に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

スポーツにおいて「もの」を使わないスポーツはほとんどない。程度の差はあれ、どの競技においても自身と一体、あるいは自身の延長となるものはスポーツ選手にとってとても重要な要素となっている。数あるものの中でも、特に靴は多くのスポーツで使用するものだ。そして、スケートではこの「靴」が特殊である。それは、スケートの場合は靴だけでなくその底にブレードがつくことで、他とは異なる特殊性がうまれているからだ。

この靴とブレードによる特殊性とは何か、これらは滑りや技にどのような変化を及ぼすのか、筆者の感覚の変化を、参与観察を通して記録し、考察を行う。

I 先行研究

1 もの研究

文化人類学でものを扱うにあたり、まずは近年のもの研究から検討する。

文化人類学において、ものはこれまで心身二元論に代表されるように、人ではない無機物として、人間生活を研究する上で対象の範囲外とされてきた。

ところが、近年はものへの回帰といえる傾向の中、人ともとの関係に着目した研究が行われている。床呂郁哉、河合香史は『もの人類学』において文化人類学でものを扱うことの重要性を示した。ここでは、ものはこれまで、人間が扱うという側面からみられてきたが、人がものに生かされている面も往々にしてであると述べられている。また、そもそも人間社会の営みは、人間だけでなく自然・環境やものとの関わり抜きには成立しないと考えている。「『もの』への焦点化を通じて、たとえば『自然／文化』、『文化人類学／自然人類学』という人類学における理論的かつ制度的分断を架橋するひとつの手がかりとなりうるのではないか、という問題意識をも含んで」[床呂、河合編 2011：2] いるというように、ものは客体として人と対照に見るのではなく、つながったものとしてのものという認識になってきている [床呂、河合編 2011、2019]。

2 スポーツともの

次に、スポーツともの関係についてみていく。ものを使うからには、そのものによって大小程度の差はあれ、どの競技であっても影響を受ける。ほとんどの競技に関係する靴の他、例えば、サッカーやテニスにおける芝の種類や生え方、アイスホッケーの防具、スティックなど、その時々、それぞれのもものと自分とを合わせることで、より競技性を向上させる。

競技に大きな影響を与えるものという視点では、水泳で着用する水着について、少し紹介する。2008年北京オリンピックにて、オリンピックという大舞台ながら新記録が続出した。この記録のほとんどが特定の水着着用者によってもたらされた。仰木裕嗣は水泳と水着の歴史とを合わせてこの水着を紹介している。この水着とは、オリンピック前後に着用されていた「レーザーレーザー」である。この水着は、着用に15分から30分程度かかる。問題となった北京オリンピックではウォーター競技の金メダリストの内94%が着用しており、タイムへの影響は明らかだったと述べられている。その後2010年1月に競泳水着の規定の変更により、水着の布地と肌を覆う範囲について制限がなされた。水泳界では、次々と水の抵抗を少なくする水着が開発され、影

響が顕著になると規制されるということが行われており、各社新製品の開発がどのように行われているかということも興味の対象となっている [仰木 2011]。

伊藤慎一郎は、レーザーレーサーが規制となる前に、この水着の効果と予想される記録について、水着表面の抵抗をデータ化し考察している。縫い目が無く、抵抗が軽減され、撥水性にも優れる、締め付け力が非常に高く、体の筋肉の凹凸を減らし、浮力を生み出す効果を持つレーザーレーサーの特徴を明らかにした。そして、選手の力とこの水着による効果が発揮された結果出てくるであろうタイムを予想し、結果に近い数値を導き出した。この予想ができるほど、伊藤はものの力の影響の大きさを感じ取っていた [伊藤 2008]。

3 フィギュアスケートともの

続いてフィギュアスケートをみていく。フィギュアスケートには、様々な付随するものがある。橘由香里らは、フィギュアスケートの採点について、ジャッジ匿名性による恣意的な点数の上げ下げなどの影響の研究を行っている [橘・栗原・伊坂 2017; 橘・栗原・伊坂 2018]。安原雅之らは、フィギュアスケートで用いられる音楽についての研究 [安原・佐藤 2017]、柳田憲一は、芸術性と編曲についての考察を行っている [柳田 2015]。町田樹は、音楽と振付の相関関係の他、振付の著作権など、フィギュアスケート競技者かつオリンピックであることを活かし、これまでフィギュアスケートで扱われてこなかったテーマを論じている [町田 2017、2020]。

いずれも近年の研究であり、フィギュアスケートという対象が新しい研究分野であることがうかがえる。本稿では、靴とブレードに焦点をあてるため、これらについては参考程度とする。

4 フィギュアスケートと靴

フィギュアスケート競技者であった小塚崇彦は、靴とブレード、特にブレードについて選手時代から考えがあったようだ。小塚は、オリンピックであり世界ランク 2 位にもなったことがあるほどの世界トップレベルの選手で

あるが、プロスケーターへ転向後、日々の練習の中で感じていた靴とブレードに対する違和感に着目し、靴とブレードに焦点をあて研究している。鉄製品のブレードのみならず、革製品の靴部分まで、自らが関わってブランドも立ち上げた。フィギュアスケートのブレードは、複数の金属を接合して作られる。このため、一定以上の負荷がかかると折れてしまう。また近年のジャンプのハイレベル化により、さらに負荷がかかりやすくなり、男子選手の中には1シーズンの間ブレードがもたないという事例も出てきている。また、小塚がブランドを立ち上げる以前は、国内生産されているものはほとんどなく、多くを海外からの輸入品に頼っていた（現在も国内生産のブレードの数は少ない）。そのため、選手は数多くある中から選ぶことはできず、そこにあるものに合わせなければいけないという状況であった。さらに、ひとつひとつ微妙な差異があり、自分に合わないものであっても、高価なこともありすぐに交換することはできないため、今あるものに合わせなければならないというジレンマを抱えている。小塚は、選手が靴に合わせられなかった場合、コーチは靴ではなく技術の問題であると捉える現状も疑問に感じていた。そのため、選手側からの視点を作り手に伝えることで、小塚はオリジナルブランドを立ち上げるまでに至り、世界初の製法¹⁾で国産ブレードが作られた。このブランド開発に伴う製品イノベーションについて、水野学と共同研究している [水野・小塚 2019]。靴とブレードについての研究を、世界選手権メダリストの実績を持つ小塚が行っており、フィギュアスケーターには心強い。ただ、本稿では、ものそれ自体に着目するのではなく、実際に使用した際の感覚に焦点をあてる。

フィギュアスケートにおけるものと感覚との相関関係を示した先行研究を筆者は見つけることができなかった。詳細な感覚が必要といわれながらも、靴やブレードには慣れて感覚を合わせていくしかないということが固定観念となっているフィギュアスケートにおいて、果たして選手は本当にすべてのものに適応することができるのか、参与観察を通して、スケーターともの、主に靴とブレードとの関わり、そしてスケーターはどのような感覚を持っているのかを、明らかにする。

II スケート靴について

本稿ではフィギュアスケートを扱うため、ここでのスケート靴とはフィギュアスケート用の靴のことを指す。

スケート靴を使用する上では、靴もブレードも一体のものとして「靴」とまとめて呼び、他のものと区別をすることが多いが、実際感覚としては、靴とブレードそれぞれ別のもので足の下に存在している。そして事実、靴とブレードは別々に作られ、それらを合わせて使用する。

フィギュアスケートの靴は靴部分とブレードの部分とに分かれている。それぞれメーカーも異なる。靴は革製品でブレードは鉄製品だからである。そのため、靴とブレードをそれぞれ選ぶ必要がある。そしてそれらをビスと呼ばれるネジで留めて合わせて使用する。

1 スケート靴

靴は、メーカーにより、革の硬さや、フィット感、重さ等に違いが見られる。素材改良により、現在は革以外にもグラスファイバーやマイクロファイバー、軽量プラスチック等が用いられている。どの素材を用いるかも、メーカーごとに異なる。

靴は消耗品と言われており、使えば使うほど、交換頻度は高くなる。トップ選手は短ければ1か月とも3か月ともいわれており、1年に数回の靴の交換を行なっている。筆者の場合、2019年の3月に履き始めたものは2021年9月まで、およそ2年半もったことになる。履き替えた当時は、もつのは1年くらいだろう、と購入したショップの方に言われていたが、同レベルの選手に比べ、滑走時間が短いことと、コロナ禍による練習時間の減少が、靴のもちに影響していると思われる（その後、練習量が増えた結果2022年8月に再度交換。1年もたなかった。練習量に比例している）。

靴は革製品であるため、はじめはとても硬い。靴の種類により硬さは様々だが、技術レベルが上がるほど、それに耐えるために靴は硬いものが推奨さ

れている。軟らかいものでは、すぐに交換しなければならない上、怪我のリスクも増えるためである。靴に守ってもらっている部分がかなりある。

2 靴紐

靴に付随する要素のひとつに、靴紐がある。靴紐は、靴にセットされた形で販売されているが、靴紐によっても感覚は左右されるため、選手はセットされている靴紐から別の靴紐に変えることもある。また、選手は同じメーカーの同じ長さの紐ならどれでも良いという訳ではなく、自分の微妙な感覚を支える「オンリーワンの紐」を重視している。大会直前に靴紐が切れそうになっても新しい靴紐に替えずに、同じ紐を使い続ける²⁾のは、このためである。

3 ブレード

フィギュアスケートのブレードは複数の鋼製品を組み合わせて製造される。滑走部分と靴との取り付け部分があり、複雑な構造をしているからである。そのため、素材改良はパーツごとに行うことが可能であり、近年は靴との接合部分のみをカーボンやジュラルミンといった素材にすることで軽量化する等の工夫がされている。また、軽量化ではなく耐久性を求めた改良では、従来の複数の鋼パーツを組み合わせる方式ではなく、一本の鋼から削り出す方式を取り入れたブレードも出てきている。

フィギュア競技の要素であるターンを行いやすくするために、フィギュア用ブレードはできる限り短くなっていて、長さは靴とほぼ同様である。ブレードには、エッジカーブ半径、溝半径、溝幅、トゥの形状という四つの要素（詳細データを巻末資料として掲載）があり、各社各モデルにより、かなりの違いがある。これらを考慮し、ジャンプやステップなどの選手の特徴に合わせて、選択する。

ブレードの中でも、氷と直接接する部分をエッジと呼ぶが、エッジの深さは、滑る、回る、跳ぶ感覚に直結する。エッジは横幅が4 mmほどしかないが、この4 mmの中央部分をへこませることで、氷との接地部分が左右2本

の細い線状になり、この2本の使いわけによって、インサイド、アウトサイド³⁾にのるということができる。へこみの深さは、エッジの深さと呼ばれる。エッジは刃物のため研ぐことが必要であり、専門の技術者が各選手の好みや、どのリンクで行うか（氷が固いか柔らかいか）、また、競技会までの期間や競技会の内容等に合わせて、微妙な調整を行う。そのため、トップ選手には熟練の技術者がついている。この研ぎ方や研ぐ時期も演技に大きく影響するため、選手は時期を熟慮する。

Ⅲ 参与観察

本章では、靴とブレードとの関係を感じ覚という視点から見ていく。筆者が実践者であることを活かし、練習拠点であるKOSÈ新横浜スケートセンターをフィールドとし、参与観察を行う。

感覚を言葉にすることは非常に難しいが、ある瞬間において言葉が豊富に現れるときがある。この言葉の表出について、諏訪正樹は「からだメタ認知」という概念を用い、感覚は言葉になりにくいという身体技法の自動化という概念に反対した。身体技法には常に学びがあり、学びを必要とするとき、つまり、それまでの日常とは異なる環境になる等、動きに影響を及ぼすようになったときに、言葉が必要になると述べている〔諏訪 2016: 65-69〕。簡単に言い換えるならば、「いつも通り」が「いつも通り」でなくなったとき、と解釈できる。今回の参与観察では、筆者が靴とブレードを変更したとき、つまり、それまでの「いつも通り」が変わった期間の記録を見る。

1 フィールド概要

KOSÈ新横浜スケートセンターは、新横浜プリンスホテルが経営しているスケートリンクである。プリンスホテルは、全国に様々なレジャー施設を経営していて、スケートリンクもそのレジャー施設のひとつである。かつては、品川にもスケートリンクを持っていたが、現在はプリンスホテルが経営するスケートリンクは新横浜のみである。

KOSÉ 新横浜スケートセンターは、1990年10月に「新横浜プリンスホテル スケートセンター」としてオープンし、2020年に開業から30年を迎えた、神奈川県にある通年リンク⁴⁾である。1992年の「新横浜プリンスホテル」オープンに先駆けて作られた。2007年、名称が「新横浜スケートセンター」となり、2017年には、ネーミングライツ契約の締結により「KOSÉ 新横浜スケートセンター」となった。2016年には、施設設備を一新するリニューアル工事を行っている。

参与観察記録は2020年6月2日から2022年3月31日の期間に行った。練習及び指導は全て日本語で行われた。

以降に記載する「エピソード」は観察記録に基づくものである。そのため、エピソード内の記述は当時の筆者の感想が含まれる。対してエピソード前後は論文の記述である。また、エピソード内の「 」で括られている発言は、全て筆者のコーチによる「指導の言葉」である。

2 靴&ブレードの変更

靴が軟らかくなり、足を固定するという役割が弱くなったため、靴を交換することにした。普段は、交換を決めてから靴を見に行き試し履きをして、どの靴にするか決める。これは、同じタイプの靴でもバージョンが変わって変更されている部分があることがあるためである。ただし今回は、前回購入時に靴を選んだ際、ちょうどバージョンの変わり時であり、新しいバージョンはあまり合わないことがわかっていたため、全く同じ型番(旧バージョン)のものを購入して持っていた。そのため、靴については迷う必要がなかった。ただ、せっかくの機会だからと、同時にブレードも違う種類に変えてみたくなり、コーチや靴職人に相談した。

相談の結果として、複数の候補の特徴がみえた。

- ①今のブレードのまま(パターン99⁵⁾)で特に悪くはないこと
- ②バージョン違いのパラボリックタイプ⁶⁾はとても滑りやすいが、耐久性が弱くパワフルなジャンパーには向かないかもしれないこと
- ③レボリューションタイプ⁷⁾は一世を風靡したカーボンを用いており、

軽く、見た目もかっこいいが、音がうるさいこと（音がうるさいことはフィギュアスケートではよしとされない）

- ④パラボリック・レボリューションタイプは②と③の特徴両方を備えていること
- ⑤メーカー違いのゴールドシール⁸⁾は使いこなせればスケーティングがしやすくなるが、使いこなすには技術が必要、さらにジャンプが跳びにくくなること
- ⑥パターン 99 とゴールドシールを掛け合わせたハイブリッドという種類があること

以上の情報が得られた。この中からブレードを決めるのだが、筆者は靴のサイズが大きく、それに合うブレードサイズはショップに在庫がないことが多い。③レボリューションタイプと⑥ハイブリッドはサイズがなく選択できなかった。

結果、筆者が使ってみたかったこともあり、これまで使用していたパターン 99 ノーマルタイプから、④のパターン 99 のパラボリック・レボリューションというタイプに変更することにした。

上記の経緯から、新しい靴とブレードが決まった。以前購入した新品の靴にパターン 99 のパラボリック・レボリューションを付けてもらった当日から、早速練習を始めた。

靴やブレードを変えるときは、毎回一般滑走⁹⁾の時間にコーチとひとつずつの動きを行いながら、状態の確認をする。滑る感じ、カーブののり方、片足での直線滑走などを行いながら、靴とブレードのずれがないかを確認する。その後は、滑りやすさや、今後慣れていく過程を考えながら、簡単な技からひとつずつ試していく。

靴は、はじめは硬いので、まずは履き慣れることから始める。靴を馴染ませるためにも、最初は足首を曲げることを意識する。馴染ませるまでは苦勞があるが、馴染んでしまえば、前の靴と同じ型のため苦勞はないと考える。

そのため、変更したブレードを中心に感覚を記述する。

[エピソード 1] 「靴とブレードの変更」

2021/9/30 一般

「まずは靴、ブレードに慣れること」。

新しいブレードは、よく滑る感覚がある（この点は各相談者からのアドバイスの通りであったと実感）。一蹴りで伸びていく。コーチも見ている、それは感じたようだ。リンク一周あたりの氷を蹴る回数が少なくなった。

ただ、ジャンプ¹⁰は踏み切りが難しい。いくら同じブレード（パターン99）とはいえ、レボリューションであり、パラボリックであるため、細かいところはかなり違う（たとえ同じブレードの場合でも、新品と使い込んだものでは、ブレードの削れ方が異なるため、感覚は異なる）。特にタイミングが合わない。跳び上がるところで、今まで跳び上がっていたような動きにならず、もやっとする。「慣れてくしかないね」というコーチの言葉を信じてやっていく。

アクセルが一番感覚が違い、跳び上がるのが怖い。

ブレードが違うだけでなぜ怖いとまで感じてしまうのか。よく滑るようになったからなのか、軽くなったからなのか、原因はわからない。

考えられるひとつの要因としては、今までのブレードでは、重さを利用して脚を振り上げて動作を行っていた部分があった。しかし、新しいブレードは軽いため、前ほど重さの利用ができない。重りが違えばタイミングも異なると考え、今後は自分の力を制御しながら、脚の力に振り回されないように、また、自分の力の範囲外にならないように行う必要があると感じた（今までは振り上げた反動で動いていたが、動きとして見てもあまりきれいでないため、変えたいと思っていた部分ではあった）。

滑りに関してはとても変わり、一蹴りの伸びがあり、気持ちがいい。1日で滑り方が変わることは考えにくいので、これはブレードの力であると考えられる。

[エピソード 2] 「最初の貸切練習」

2021/10/1 夜練¹¹⁾

靴が変わったためか、これまでの感覚と合わず、今日もうまく跳べなかった。

パンク¹²⁾ や緩く締めたジャンプが多かったため、「とりあえず締めてみよう」と言われたが締められない。そもそも締められる場所に跳びあがれない、と感じる。

あまりに跳べない中、なんとか締めて跳んだ。だが、締められたものの自分のポジションではないと感じる。「体が、中に持ってかれてる」状態のようだ。原因として「カーブ入りすぎ」になってしまっている。ブレードを変え、滑るようになったため、のりやすいコースが変わってしまったのかもしれない。良い場所が見つからない。

靴とブレードを同時に変えてしまったため、どちらが原因なのかがわからないが、靴は個体が異なるものの同じメーカーの同じ型の製品であるし、これまでも靴の変更で大きく感覚が変わったことはないことから、要因としてはブレードの違いによるものと考えられる。ただ、どちらにしても、一つでも変えたら感覚が変わるため、それに慣れる練習が必要である。スピードやカーブ等をもう一度見直し、できる形にしていく。

[エピソード 3] 「感覚の再構築」

2021/10/6 夜練

ジャンプの練習では、フリップのときに、「いい感じに降りている」、「それで（今の跳び方で）やって（他のもやればいい）」と言われ、アクセルの練習を始めた。ただアクセルは、まだ跳ぶポイントも、跳ぶ前のる位置もわからない。

「力すごい入ってる」、「こう（左に）手も体も、上半身を持っていってる」。バランスが取れないために、力で制御してしまっている（力を使いだしたら成功出来ない）。緩くのろうとするが、「カーブ中に入っていっ

てしまっている。もっと外へ」。中に入りすぎているので、「もっと正面に、気持ち的には右へ外れるくらいの気持ちで跳んで」と言われる。

言われていることは理解でき、どうすれば跳べるかはわかるが、形にできない。そのことを伝えると、「バックアウト¹³⁾の形変わってない?」、
「今はカーブより内側に入っていてしまっている」。この点に注意したところ、足は変わった。成功はできないが自分ができるときの踏み出す感覚に近づいた。

新しい靴とブレードで練習し、少しずつ慣れて、できることが増えてきた。ただ、まだ全ての感覚がつかめているわけではなく、メンタル的に難しい時期だ。身体の中にできる感覚がなくなっているわけではないのに、その場所へ行くことができない、というジレンマを抱えて練習している。気持ちが先走ると力が入ってしまい、捻りを作り出せない、回ろうとすると回れない、という悪循環へ陥ってしまっている。

感覚がずれているので、できていたときの形をコーチから教えてもらいながら練習をする。そうすると、いつのまにか自分できていなかったポイントがみえてくる。

感覚を探りながら、反復練習をしていく。

[エピソード 4] 「試合」

2021/11/13

ウィンタートロフィーという国体予選を兼ねた試合が終わった。結果はよくない。試合終了後、なんともいえない悔しさと、モヤモヤ感に襲われた。

理由は、自分らしい動きが全くできなかったためである。自分で納得できる動きではなかった。演技としては練習通り。特に練習の成果が出せなかったわけではない。でも、始まる前のモチベーションは高かったし、精神的にも伸び伸びできる感じだった。にもかかわらず動きが全然違った。納得がいかない。

試合で自分の動きが出来ず、悔しい思いをした。映像をみて振り返りをする中で、原因はブレードかもしれないという可能性に思い至った。このところ、地に足がつかず、浮いている感覚がぬぐえなかったが、原因は靴とブレードに慣れなためと思っていた。しかし、原因は慣れなことだけではなく、そもそも、ブレードを変える時に靴職人にアドバイスをうけたように、自分の滑りとこのブレードが合っていないのかもしれないと、2か月経過してようやく思いいたった。

このことから、ブレードに焦点をあてて自分の動きを分析すると、自分の感覚通り、確かに滑りは今までと比べて格段に良い。滑っていくし早い。これは、ブレードの力によるものが大きいと思わざるをえない。しかし、ジャンプ、スピン等、靴の重さを生かす動作になると、動きが異なる。見たままの感想を述べるならば、自分の身体の動きと氷面とが全くマッチしていない。浮いているようにさえ見える。特にジャンプの踏み切りの際に、身体が跳びだすタイミングと靴（とブレード）が氷を蹴るタイミングとが全く合っていない。そのために軸が外れたり、無理やり力でバランスを取っている。

本当にブレードが原因なのか、コーチと相談し、靴とブレードを前のものに戻して、動きを試してみることにした（前の靴には、以前のブレードがそのまま付いている）。靴自体は、新しいものと古いものは同じメーカーの同じ型のものだが、前の靴は軟らかくなりすぎてヘニョヘニョのため、ビニールテープで補強して、試すことにした。

3 ブレードの再変更

ブレードを試すために、本当はブレードだけを取り替えたいところだが、新しい靴にそれを付け替えることは現時点では行わない。これはなぜかという、靴の底の素材は樹脂のため、ブレードを付けるネジ穴がたくさん開いてしまうことを防ぐためである。底面積は小さくなく、またブレードを付ける位置も大きくは変わらないため、何回も付け替えを行うとブレードがずれてしまい危険である。そのため、まだ試してみる段階では、新しい靴に付け替えはせず、前の靴を使用し試すことにした。

靴を使い続けるためには、テープという補強手段が使えるが、毎回同じようにいかないのが難しい。時間も余計にかかってしまい、面倒でもある。ただ、それを行うことによって、ある程度の期間はしっかり練習することは可能である。

[エピソード 5] 「ブレード一つで変わる感覚 軽さ」

2021/11/15 一般

今日から前の靴とブレードに戻して練習を開始した。

最初はまた感覚が、少し違う。具体的には、滑る感覚を比べると、加速がまるで違う。ノーマルのパターン 99 は、パラボリック・レボリューションに比べると、滑らず、重い。軽く伸びやかに滑ることができない。滑りに関しては、パラボリック・レボリューションの方が断然のりやすいようである。

次にステップ¹⁴⁾を試した所、ステップはあまり変わらず、普通にできた。

スピン¹⁵⁾は、シットスピンはきれいにできた。フライングシットスピンも連続で成功できた。いい跳び上がりで跳べて、そのまま回ることができた。フライングスピンは、その名の通り、跳び上がってからスピンを行う。そのため技の始まりはジャンプに近く、このフライングスピンもブレード変更後の2か月はほとんどできていなかった。

ジャンプは、はじめは、また踏み切りの感覚が異なり全然踏み切れない（ブレードが違うと感覚が異なり、最初は怖い）。コーチから「足首曲がってない、膝だけ曲げてこんな感じ」と言われた。そこで、少し力入れて曲げてみた所、最初は（曲げすぎて）沈んだだけだったが、その後は調整できて、とりあえず踏み切れるようになった。

靴を替えたときと同様に、ひとつずつ段階を追って確認していく。元履いていた靴とはいえ、しばらく他の靴を履いていたため感覚が異なり、いきなりはじめから元通りとはいかない。とはいえ、ジャンプの踏み切りはすんな

りいかなかったが、以前から使っていた身体の形だということもあり、初日で跳び上がるころまでできた。また、スピンやステップは問題なく行えた。というよりも、感覚を取り戻したという感じに近かった。戻してよかった、と感じるが、今まで2か月間でできなかったことを、安易にブレードのせいにしたい、という甘えも感じており、それはそれで怖いので、本当にブレードのせいなのか、このまましばらく続けてみて、様子を見ることにした。

[エピソード 6] 「成功」

2021/11/19 夜練

アクセルの練習（振り切りの感じ、いい感じ。氷を掴めている）。

跳べているのに、降りられない。「降りる感覚なくなってるから、降りる、って意識して」と言われて、（ここ！）というポイントで思いきり手を伸ばしてみた（止めようと回転を止める動作）が、回ってしまった。「それでもダメかー、跳ぶことはできているから、降りることだけ考えて」（コーチも本気で降りられる、と思っている口振り）と言われて、跳び方は今までの感覚のままを信じ、考えずに跳び、降りる方だけに集中して、跳んでみる。

できた！

回転としての姿勢はあまりよくなかったかもしれず、チェック¹⁶⁾も前かがみになっていたが、降りられた！「よーし、半年ぶりだ」と冗談を言いながら、コーチも笑って喜んでくれた（ホッとした。コーチもホッとしていたようである）。「もう一回、やろうか」ということで、もう一度挑戦。「さっきと同じようにね！」と、考えすぎてできなくならないように、コーチから声がかかる。自分でも集中して、ほとんど同じように跳べて、成功できた！

練習を終えた後、「やっぱりブレード変えて（元に戻して）よかったかもね。降りたし。もういつでも替えて（古い靴ではなく、新しい靴に元のノーマルブレードを付け替えて）いいよ」と言われた。ブレードを戻した方がよくできたので、新しい靴に、以前のブレードを付け替えるこ

とに決めた。「このまま、跳べるようになったし、感覚を戻してからでもいいし、新しい靴に早く慣れるのでも、どっちでもいいよ」とのことだったので、自分の感覚でいつ頃、と決めることにした。

ブレードを変えて2か月、ずっと跳べなくて、感覚も狂ってしまい、悔しい思いをたくさんしたが、元のノーマルタイプに戻したら1週間で跳べるようになった。どんなに身体の動きを変えたところで、身体と氷との間にあるブレードが合っていないければ成功できない、と体感した。靴はヒート¹⁷⁾等を行うことで足にフィットさせていくことができるが、ブレードにはそのような手段はない。

ブレード一つで、感覚はこんなにも変わるのだと、身をもって実感した。

4 靴との再調和

ブレードがあまり合っていなかった、ということがわかったため、前の靴と前のブレードという組み合わせから、新しい靴に前のブレードを付ける、という組み合わせへ移行する。

替えるならば早くから感覚を掴みたいため、なるべく早めに付け替えたいところだが、ようやく取り戻したアクセルの感覚をもう少し掴んでから、と思い、1週間は元の靴のまま、感覚を戻すことに専念した。1週間、それなりに跳べ、感覚を戻せた、と思えたため、新しい靴に以前のノーマルタイプを付け替えることにした。

[エピソード 7] 「新しい靴と以前のブレードとのマッチング」

2021/11/26

この日、スケートショップを予約し、新しい靴に元のブレードを付け替えることにした。

付け替えがおわり、一般の時間に試し履きをした。いつも通り、コーチにブレードの位置の確認をしてもらう。今回は、まずは陸上で立ち、真っ直ぐかどうかを確認した。「よさそう」という感想。位置は「大丈夫

そうだね」。

次は水で、「色々な動きしてみて」と言われ、動いてみた。コーチと一緒に滑りながら、片足滑走をして、真っ直ぐ滑っているかを確認した。スピンを試してみたら、かなりよい感じにできる。スムーズに靴の移行ができています。

次にジャンプを跳んでみた。まずはスリージャンプ。いい感じに跳べた。コーチも「できるね、大丈夫」という感じである。スリージャンプはカーブにのって、踏み切りきれた感覚がある。だが、まだジャンプの際は、靴が硬くなった（軟らかすぎたものから変更したため）こともあり、踏み込みをしっかりとしないと外れたりしている。「力じゃなく、（動きで）振み込む感じ」。

靴にブレードを取り付ける際は、多少の位置を変えられるよう、はじめは、少し移動が可能な穴があり、その穴のみにビスを入れる。これが仮留めといわれる状態であり、強い負荷のかかるジャンプなどは跳べない。位置がよければビスの大きさしかない穴へビスを入れ、本留めする。このとき全ての穴は埋めず、半数から7割くらいを留める。今後使っていく、緩くなってきたときに、他の箇所でも新たな留めの場所を作るためである。

今まで仮留め状態のときに大きくずれていたことはないのだが、コーチによると、「本当にずれているときには、カーブにのった時に、グイッと急激なカーブになってしまう。そうなるようなら、ずらしたほうが良い。でもそうでないなら、それはその時々、位置だからそれに慣れるしかない」とのことだった。取り付けは手作業のため誤差が出てしまうが、少しの誤差は慣れてカバーするしかないのが現状だ。

パターン 99 のノーマルタイプをそのまま付ける、ということはブレード変更の際におすすめされた、本章第2節の五つの候補の内の①のパターンであり、紆余曲折を経てこの組み合わせにたどり着いた。ブレードは元に戻したが、靴は再度新しいものに変ったため、感覚もまた少し異なる。ただ、靴も違うブレードを付けてはいたが2か月履いたものであるため、履き始めの

頃のような硬さはなくなってきたおり、ジャンプも前よりは跳び上がれるようになっていいる。ここからまた、新たに感覚を取り戻す練習が始まる。

[エピソード 8] 「靴とブレードとの調和」

2021/12/8

ようやく、形が見えてきた。

「(アクセル) 跳ぶのいい感じ。あとは降りるだけ」自分でも跳べる感覚がある。「そう！」と声がかかった時があったが、転んだ。「(着水時に) クシャっとなっちゃったよ」といわれた。回りすぎが多いため途中で緩めたら、足まで緩めてしまった。跳ぶ感じはいいが、回転しすぎて降りられない。「空中で開くのをもう少し早く。少し早くから、降りる準備をする」。

練習の最後、最後の最後に、2回目の曲かけ練習¹⁸⁾の中で、ようやく降りられた！

靴が変わってから、初である。

靴の変更後は10日ほど、硬さに惑わされてしまい時間がかかったが、むしろ回りすぎのことも多く、よく跳べているのかもしれない。ようやく靴を変えてから降りられるようになった。

結局のところ、はじめからブレードを変更せず靴だけ変更すればよかったというのが技の練習だけをみたときに思うことだが、ブレードを変更したことによって感覚がこれほどまでに変わるということを実感することができた。パラボリック・レボリューションにしてから滑りは格段によくなったものの、2か月の間ジャンプは思うように跳べなかった。さらに、跳べていたアクセルジャンプは1回も成功出来なかった。それが戻した途端、1週間のできるようになり、さらに靴を替えてからも、10日ほどでできるようになった。その後も成功できている。フィギュアスケートは滑るだけでも、跳ぶだけでもない。どちらも必須であり、さらに本稿では記述していないが曲に合わせて演技するという要素も加わる。複合的な要素が絡み合う中で、ブレードは、

感覚というスケートにおいて最も重要なものに大きな影響を与えていた。

IV 分析・考察

1 認知生成プロセス分析

靴も、ブレードも、たとえ同じブランドの同じ種類のものであっても、個体により微妙に異なり、感覚に影響を与える。難易度の高い技（特にジャンプ）に挑むようになると、少しの感覚のずれが致命的になり、跳べなくなってしまう。また、同じブレードでも、研ぎたてと、滑り込んでからではかなり感覚が違う。滑り、回り、跳ぶためには、氷にも靴にもブレードにも、鋭く感覚を合わせていかなければならない。靴もブレードも慣れが必要なことはわかっていたが、今回の経験では、慣れだけでは補えない感覚の調整を考えさせられた。

Ⅲで提示してきたものは、筆者の実際の練習でのエピソードであるが、今回感覚が大きく変わり、言葉が豊富になったのは、ブレードに対しての違和感を持っていなかったにも関わらず、靴を変えるタイミングでブレードも変更してみた時であった。この感覚の変化を項目ごとに表にまとめることにより、詳細な分析を試みる。

感覚の変動ごとにフェーズを分け、図表にした（表①）。これは、ブレードの変更と関連している。併せて、文章中の節とも対応している。

まず、パラボリック・レボリューションのブレードについては、第一フェーズのブレード欄にあるように、メリットである「よく滑る」という特徴と、デメリットである「音がする」という特徴の両方が現れている。このことから、スケートिंगスキルによらず、ブレードそのものに滑りに対する特徴があることがわかる。

変更前の段階では、それまでずっと使ってきたブレードであり比較対象がないため、各動作に対して特別に言葉になる何かを感じてはいないが、対して、第一フェーズ後は、靴、ブレードを変更したため、それまでとの比較から様々な「違和感」を感じていて言葉となるが増えている。この状況は

表1 感覚の変動ごとのフェーズ

エピソード	変更前		第一フェーズ		第二フェーズ		第三フェーズ		第四フェーズ	
	エピソード前	エピソード1	エピソード2-3	エピソード4	エピソード5	エピソード6	エピソード7	エピソード8		
靴	靴らかくなくすざ、溜めが作りにくい	硬い、慣れない			靴らかい、テープの締め方で硬さが変わる		少し硬い	コントロールできるようになってきた		
ブレード	特に感じていない	軽い、音がする			重い		同じ感覚			
スケボーテイング	特に感じていない	よく滑る、一蹴りで伸びる		自分の動きがでさなかった	滑らない		同じ感覚			
ジャンプ	重さをとびあがりに利用	タイミング合わない	締められない	失敗	最初はタイミンク合わない	感覚戻ってきた重さをとびあがりに利用	似た感覚	成功		
ジャンプで言われた言葉に マッチングに 対する感覚	振り回している	慣れるしかない	中に持ってかれてる	力入ってる	踏み込む	降りること考えて 降りることに 踏み方思いだした	踏み込む	降りる準備 合ってきた		

「いつも通り」が変わったからといえる。この表の中では、フェーズが変わるごとに、毎回、靴又はブレード、又はその両方が変わっているが、第四フェーズでは、「同じ感覚」又は「似た感覚」となっている表記がある。第四のフェーズは、ブレードは元に戻して靴だけを変更したフェーズである。このことから、フィギュアスケートにおける感覚の変化は、「靴よりもブレードの要素が大きい」ということが言える。

また、表の中で同じ言葉が出てくる箇所として、第三フェーズのエピソード5と第四フェーズのエピソード7のジャンプに対してかけられた言葉の「踏み込む」が挙げられる。これは、ブレードは以前の重いものに戻し、靴だけを新しい靴に再び戻した際のフェーズであるが、使い込んで柔らかくなりすぎた靴と新しく硬い靴という、正反対の性質を持った靴を履いた際に対する言葉であることが興味深い。このことから、靴を変えたタイミングにおいては、靴が軟らかいか硬いかに関係なく感覚に狂いが生じ、踏み込みの動作が曖昧になる、つまり「氷を押す力が弱くなる」ということがわかる。これは面白い発見だった。硬い靴は踏み込まなければ曲がらないということは、身を以て（痛くして）感じていたが、軟らかく履き込まれた状態でも、一旦異なる感覚で練習したことにより、踏み込みの力加減が曖昧になってしまったということだ。このことには全く気付いていなかったが、改めて表に起こしたことにより、気づきを得た。

これまでの参与観察から、フィギュアスケートにおける感覚にはブレードが大きく関わっていることがわかった。以下、2点から考察を行う。

2 相性

論点として、一つめに、相性をあげる。人と人、ものともものに相性があるように、人ともにも相性がある。どんなに良い製品でも自分に合わなければそれは活用されないし良い方向へは向かわない。人ともものが調和したときに、それは一体となり、ものは単なるものではなく自分自身の延長線上の存在となるのではないか。

スケート靴の場合、靴とブレードという二つのものの組み合わせの問題も

ある。それぞれの相性が良いものもあれば、組み合わせによってはその相性が崩れる場合もある。また、スケート靴では、靴とブレードという二つのものが合わさることにより生まれた、新たな一つの「もの」と人との相性も見極める必要がある。Ⅲで詳述したように、筆者が体験して感じたことは、軽いブレードは、パワーを使ってジャンプを跳ぶスケーターには合わないのではないかということだ。

表①の第一フェーズは、比較的軽い靴と、現状最も軽い部類のブレードという組み合わせの状態である。この組み合わせの場合、スケートングに関しては、よく滑り、伸びていく感覚があった。しかし、ジャンプではタイミングが合わず、また全体的にはフリーレッグ¹⁹⁾が軽く扱いが難しいという感覚であった。ただ、このフリーレッグの軽さに関しては、重りが無い分自由に動かすことができるという側面もあり、ステップなど、足が重いと感じていた場面では、足が軽くなりスムーズに動かすことができた。しかし、重さがなくなったことで、ジャンプのみならず、ステップを含む全ての動きにおいてタイミングが狂ってしまった。この狂いが、エピソード4での所感「浮いている感じ」に繋がってくると考える。

またこのフェーズにおいて、ブレードの変更によりジャンプに怖さが生まれた。これは、それまで使っていた重りの利用ができなくなったためだ。足の先に重たい重りを付けている状態から、急に軽い重りに替えたとき、足の振りのタイミングがずれることは容易に想像できるだろう。このタイミングの変化が跳び上がりに影響し、怖さへとつながった。怖くなってしまえば、当然身体は硬くなるため、タイミングはますます狂ってくる。

これが、第二フェーズ、第三フェーズにおいて、第1節で分析したように、ブレードを重いものに戻しても、はじめはタイミングのずれが起こり、踏み込みの動作が弱くなる等の動きの変化が起こった。しかし、その後1週間、或いは10日ほどで完成形まで持っていけるほど、タイミングの掴みは早かった。これは、おなじように週4~5回という練習頻度の中で、2か月経ってもタイミングが掴めなかった第一フェーズと比べると、ブレードの重さの変化と滑る勢いの変化は、慣れによる克服の範囲を超えていたと分析できる。そ

の点、靴に関しては、10日という比較的短期間で慣れたことから、慣れにより克服できる範囲のものと分析できる。

もの一つとではなく、もの二つと良い相性でないと、身体の動きとマッチせず成功へと向かわない。しかし、ブレードは購入時に滑ってみることはもちろん、付けてみることをさえできないため、購入し、靴に取り付けて滑ってみるまで、その感覚も、相性もわからないことが、フィギュアスケートにおけるものとの付き合いの難しさである。

3 主役はものではなく人

次に、前節の論点からさらに詳細に、フィギュアスケートとものについて掘り下げる。二つめの論点は、必ずしもものによって成績は左右されないということだ。

スポーツとものとの関係については、Iにて水泳競技のレーザーレーサーという水着の着用禁止の事例を紹介した。これは、水着というものによってパフォーマンスに直接影響を与えることができるという理由で禁止になった事例だ。プロ野球での金属バット使用禁止などもこの例であろう。ものの力で、ある程度の技術をカバーできてしまう、スポーツパフォーマンスにおいて、ものが大きな影響力をもってしまう事例である。スポーツは人が行うものであってものが行うものではない。ものが主役になってはいけない。

フィギュアスケートの場合、何か特定の素材のものを使用すると格段にパフォーマンスが上がる、といったようなことは今のところなく、トップ選手が一様に同じものを使っているということも起きていない。一時期、そのような期間があっても、それは単なる流行りにすぎず、結局は個人の好みに落ち着く。

理由として、3点考察する。まず、誰に対しても格段にパフォーマンスが向上する素材が見つかっていないということがいえる。近年のスポーツにおけるものの進歩は、その多くが素材改良にあった。これを踏まえるならば、フィギュアスケートにおいては、まだ最適なものが見つかっていないともいえるかもしれない。ただし、素材改良が全く進んでいないかというところ

はなく、ブレードの一部にカーボンを使用することで軽さを生み出し、一大ブームになった。今でもカーボン素材を使ったブレードの使用者は多い。ただ、今回参与観察において、筆者がこのカーボンタイプが合わなかったように、ほとんどの人に合うものというわけではない。

次に、数値を測るのではなく、採点競技であるということがあげられる。例えばタイムを測るスポーツであれば、早ければよいなど、その項目1点のみに注力すればよいが、採点競技の場合は、出来不出来に加え、完成度や美しさが求められる。選手自身がどんなに良い出来だと感じても、採点基準に合わなければ成績には繋がらない。フィギュアスケートは他の採点競技種目の先駆けとして、採点の具体性を持たせたと評価されているが、それでもジャッジの主観による部分は数多い。技をきれいにすることに加えて、4分間の作品として評価に値するものを作るときに、ものが技術を補うことができる部分は限られている。

最後に、複合的な動作が多いということがある。ステップに関しては、ブレードが短いもの、ブレードの高さが高いものが行いやすいが、フィギュアスケートの技は、ステップだけではない。ジャンプ、スピン、ステップと複数の要素がある。そのため、ものは、いずれかの技に特化することができず、特性は「強み」にしかない。

さらに要素の中でも特に、今回の参与観察の中心的対象であったジャンプに注目すると、高く跳ぶ、早く回る、きれいに着氷する等それぞれの細かい動作に特化しただけのものならば、今の技術では簡単に作れるのかもしれないが、これらの全てを複合した動作が約0.6秒の中で行われるとき、もののみで格段にパフォーマンスをあげることはやはり難しい。ブレードに関しては、跳ぶことと回転することには、軽さと小回りが利きやすいことという条件が比較的似た要素が求められるが、着氷は、体重の5倍ほどが片足にかかってくるため、足になるべく負担をかけないことが求められる。これらを両立しなければならないことは極めて難しい。また論点の一つめで述べたが、氷上ならでのスピードを活かすほか、靴の重さを利用することで、陸上で跳ぶよりも高く、早く、回ることが可能である。競技者にある程度のパワーが

あれば、この重さの利用によるメリットが大きいということが参与観察からの結果であり、筆者にとっては感覚を大きく変えてしまうほど重要であった。複合的動作の多いフィギュアスケートという競技においては、ものによって多数の競技者のパフォーマンスをあげることは難しく、人によって身体の使い方がそれぞれであるように、人それぞれ適したもの、好みはまちまちである。

V 結論

本稿では、文化人類学という視点から参与観察を行い、フィールドノートに記述をするという方法を取り、日々の言葉と動作、身体感覚を記録した。ここから、認知科学でのからだメタ認知理論を引用し、経験と感覚の記録を整理することで、感覚がどのように変化していくのか、また作られていくのかという認知生成プロセスとして表出することを可能にした。この新たな分析過程を本稿での結論としたい。

この認知生成プロセス分析を行うことにより、フィギュアスケートにおいて「靴とブレード」と「競技者」の相性が、滑りや跳ぶという動作に大きく影響することを示した。靴による影響ももちろんあるが、接地面わずか4mmのブレードの変更により、スケーティングやジャンプの跳び方が全く変わり、スケーター自身と一体になることができなくなってしまうという特殊性も明らかになった。また、滑り、跳び、回り、止まるなどの異なる動きを組み合わせ、音楽に合わせて、美しく、表現するという複合的な動作が必要なフィギュアスケート競技における、靴とブレードの特殊性も明らかにできた。

人とものお互いにそれのみでは完成しない。スケートにおいては技能を備えた人がいなければ表現できない。またその人の技能に適合した靴がなければ、またブレードがなければ、フィギュアスケートとしての演技をすることはできない。そして、フィギュアスケートにおいては、人ともの一つではなく、もの二つとの関係を構築しなければならないことも本稿で明らかにで

きた。フィギュアスケートにおいては、人が靴とブレードと一体となることが求められるが、一体となるためには、人が妥協するのではなく、協調することが大切であると、自身の経験を通して実感することができた。

しかし、フィギュアスケートにおいては、靴もブレードも高価²⁰⁾であり、さらにブレードは実際に付けてみなければ自身との相性がわからないという現状があり、選択は非常に難しい。なんとも歯がゆい現実である。コーチの「靴やブレードには合わせていくしかない」という言葉は、「どんなものでも対応できる」という意味ではなく、ものの性質上試すことができない、また、高価であるなどの理由を起因としていた。

今後も、筆者はフィギュアスケーターとして日々の練習を続けていくが、技術の進歩を目指すとともに、その重要な手助けをしてくれるものの発展と協調性についても注力しながら、参与観察を続けていく。

注

- 1) 世界初の製法 … ひとつの金属の塊から削り出す製法。IIの第3節で述べている近年の新たな製法と同義。
- 2) 靴紐の感覚 … フィギュアスケート界で最も有名なのは2010年バンクーバーオリンピックでの織田信成選手の演技中に靴紐が切れてしまったハプニングだ。
Asahi.com 2010/2/20 「織田の靴ひも、試合前から切れていた 新調査 感覚重視」
<http://www.asahi.com/olympics/news/TKY201002200001.html> (2022/11/16 最終閲覧)
Number web 2022/2/7 「『ショックすぎて、言葉になりません』たった1度の五輪で演技中断…織田信成を襲った“まさかのアクシデント”とは？」
<https://number.bunshun.jp/articles/-/851776?page=3> (2022/11/16 最終閲覧)
- 3) アウト・イン・フラット エッジ … フィギュアスケートのブレードは中に溝があり、溝の両端で滑走する。それぞれの足の内側のライン（エッジ）をインサイド、外側をアウトサイドと呼ぶ。真っ直ぐに滑る際には、両方のエッジをつけることでフラットエッジとなる。ただし、フィギュアスケートでは、基本的には常にインサイド又はアウトサイドのエッジにのっていることが前提となる。
- 4) 通年リンク … アイススケートリンクには、通年リンクと、季節リンクがある。季節リンクは、夏の間はプールとして営業形態を変えて営業する施設と、夏の間は閉鎖休業する施設がある。2021年8月現在、日本全国には144のリンクがあるが、このうち通年リンクは29

である。日本スケート連盟 HP「全国スケートリンク」<https://www.skatingjapan.or.jp/rink/> (2022/11/16 最終閲覧) を基に筆者が集計。

- 5) バターン … 正式名称はバターン 99。前の型である 88 は 1980 年代の商品であり、現在出回っているのは 99 のみのため、スケーター間では 99 を略して呼ばれる。ブレードの種類のひとつ。ジョン ウィルソン社の製品。ジャンプの跳びやすさに定評がある。
- 6) パラボリック … ブレードのバージョンのひとつ。ブレードの中央部が細くなっている型。
- 7) レボリューション … ブレードのバージョンのひとつ。靴とエッジの間が鉄ではなくカーボンになっている型。
- 8) ゴールドシール … ブレードの種類のひとつ。ジョン ウィルソン社の製品。滑りやすいことに定評がある。
- 9) 一般 … 大きく、リンクの営業時間のうち、一般営業の時間と貸切の時間とにわけられる(貸切については注の 11 に記載)。一般滑走時間とは、スケートを楽しむ場として一般に開放・営業している時間である。通常その日の使用料・滑走料を支払って利用する。ただし、クラブ所属の選手は、クラブ契約の特典として、一般滑走時は自由に滑ることができる。ただし、コロナ禍以降は一般滑走の時間は中止されており、代わりにクラブ員が料金を支払って滑る貸切時間となっているが、枠の時間が変わらないため、クラブ員間では変わらず一般と呼んでいる。
- 10) ジャンプ … 回転は全て同一方向(ほとんどの選手が左回転)である。左回転の選手は、着氷は全て右足となる。トゥループ、サルコウ、ループ、フリップ、ルッツ、アクセルの 6 種類である。これらはアルファベット表示で略すことがあり、順に T、S、Lo、F、Lz、A である。このうち、トゥループ、フリップ、ルッツジャンプを、トゥをつけて跳びあがるためにトゥジャンプと呼び、サルコウ、ループ、アクセルをエッジで跳びあがるためにエッジジャンプと呼ぶ。ジャンプごとの詳細は用語まとめの最後に別途まとめた。回転数は 1 回転をシングル、2 回転をダブル、3 回転をトリプルと呼び、4 回転は 4 回転又はクワッドと呼ぶ。回転数はそれぞれのジャンプの名称の前に付ける。例えばアクセルジャンプの 3 回転はトリプルアクセル (3A) である。

ジャンプ詳細

ジャンプ名	トゥ or エッジ	滑走足	踏み切り足	基礎点 (トリプル)
トゥループ	トゥ ジャンプ	右 バックアウト	左	4.2
サルコウ	エッジ ジャンプ	左 バックイン	左	4.3
ループ	エッジ ジャンプ	右 バックアウト	右	4.9
フリップ	トゥ ジャンプ	左 バックイン	右	5.3
ルッツ	トゥ ジャンプ	左 バックアウト	右	5.9
アクセル	エッジ ジャンプ	左 フォアアウト	左	8.0

- 11) 夜練 … クラブ貸切の時間の一部である。5：30-9：45の時間にあるクラブ貸切を朝練、17：45-21：35の時間にあるクラブ貸切を夜練と呼んでいる。
- 12) バンク … ジャンプの失敗の形のひとつ。踏み切りの際、タイミングが合わないことで、身体をまとめられず開いてしまい、ほとんど回転できない状態を指す。
- 13) バックアウト … 後ろ向きの滑走（バック）でアウトサイドにのっている状態のこと。前向き滑走はフォアと呼び、それぞれにインサイド、アウトサイドにのることがあるため、滑走時は常に、フォアイン、フォアアウト、バックイン、バックアウトの四つの内のどれかとなる。
- 14) ステップ … ステップは、ターンとステップの2種類に分けられる。ターンは、ツイズル、ブラケット、ループ、カウンター、ロッカー、スリーターンの6種類、ステップは、トゥステップ、シャッセ、モホーク、チョクトウ、エッジの変更、クロスロールの6種類である。この中で難しいターン及びステップとして採点上認識されるものは、ツイズル、ブラケット、ループ、カウンター、ロッカー、チョクトウである。
- 15) スピン … アップライト、シット、キャメルの3ポジションがある。基本の回転は全て同一方向（ほとんどの選手が左回転、ジャンプの回転方向と同じ）である。全て片足で行う。両足になったタイミングでスピンは終了したとみなされる。シットはスケーティングレッグ（注の19に記載）の大腿部が少なくとも氷に平行となっている姿勢、キャメルはフリーレッグ（注の19に記載）が後方に位置し、その膝がヒップより高い姿勢、その他スケーティングレッグを伸ばして、又は軽く曲げて行う全ての姿勢がアップライトである。これら三つの基本姿勢に工夫（パリエーション）を行うことでレベルが取れる。レベルがあがると技の基礎点上がる。最大レベルは4である。コンビネーションスピン（技の正式名称はスピン・コンビネーション）は、3ポジションを最低2回転ずつ回ることが求められる。
- 16) チェック … ジャンプの着氷時の姿勢。回転動作を止める動き。
- 17) ヒート … スケート靴を足にフィットさせるための作業。スケート靴を温め、すぐに靴を最大限きつく締めて履く。15分～20分ほど履き続けて自身の足型に合わせる。ヒートをしてから24時間は形が変わる可能性があるため練習はできない。
- 18) 曲かけ … クラブ貸切時間内における、個人の曲をかけての練習を指す。新横浜では貸切開始6分後から曲をかけることができる。5人以上曲をかける人がいる場合は予め順番を決めて練習する。順番は苗字の五十音順である。貸切終了時間に曲の途中だった人が、次の貸切での最初の曲かけ練習者となる。
- 19) フリーレッグ … 片足滑走時に、滑走している足ではない方の足。滑走している足は軸足又はスケーティングレッグと呼ぶ。
- 20) 今回名前の挙がったブレードはいずれも1組¥80,000以上である。

参考文献

伊藤慎一郎

2008 「スピード水着レーザーレーサーの科学：抵抗軽減による世界新記録予想と北京五輪記録との比較」『ジョイント・シンポジウム講演論文集：スポーツ工学シンポジウム：ヒューマン・ダイナミックス』2008：181-184

仰木裕嗣

2016 「『LZR Racer™』に至る水着開発の変遷」『成形加工』23(6)：330-335

諏訪正樹

2016 「『こつ』と「スランプ」の研究 身体知の認知科学」講談社選書メチエ

橘由香里・栗原俊之・井坂忠夫

2017 「フィギュアスケート男子シングルにおけるジャンプの成功と演技構成点の関係」『日本体育学会大会予稿集』68(0)：218_1-218_1

2018 「フィギュアスケートの採点におけるジャッジ匿名性の有無による影響」『日本体育学会大会予稿集』69(0)：205_3

床呂郁哉・河合香吏編

2011 『もの人類学』京都大学学術出版会

2019 『もの人類学2』京都大学学術出版会

町田樹

2017 「フィギュアスケートにおける音楽と身体技術の相関性：自作振付の分析を中心に」『日本体育学会大会予稿集』68(0)：38_2

2020 『アーティストックススポーツ研究序説 フィギュアスケートを基軸とした創造と享受の文化論』白水社

水野学・小塚崇彦

2019 「リード・ユーザーとメーカーによる共創型製品開発：フィギュアスケーターによるフィギュアスケーターのための製品イノベーション」『マーケティングジャーナル』39(2)：6-21

安原雅之・佐藤さくら

2017 「フィギュアスケート競技で使用される音楽の研究：第15回オリンピック冬季大会（1988年）における女子シングルに焦点をあてて」『愛知県立芸術大学紀要』47：135-147

柳田憲一

2015 「演技構成を目的とした音楽再構成に関する研究」『東京女子体育短期大学紀要』50：119-127

☒



図1 フィギュアスケート靴 靴部分のみ



図2 フィギュアスケート靴 ブレードのみ



図3 フィギュアスケート靴 靴とブレード合わさったもの
実際に履く形

〈資料〉

以下にブレード要素の詳細を記す。

① Rokker ロッカー（エッジカーブ半径）

ロッカーとはブレードの滑走部分の湾曲度合いを指す。滑走部分の弧の半径が小さいほど、反り上がった形になり、大きいほど平らに近い形となる。

半径が大きいほど、平らに近くなるため、安定しやすい。半径が小さいほど、氷と接する面が少なくなるため、ターンをしやすく、深いカーブにのりやすいという特徴がある。カーブ半径が小さくなるに従い難易度が上がるため、上級者向きとなる。

② R.O.H. (Radius Of Hollow) ホロウ（溝半径）

ホロウはエッジ間（1本のブレードの両端）の弧の半径を指す。溝が深ければ、エッジが鋭くなり、氷の上でのグリップ（掴み、噛み）が強くなり、明確なエッジを行いやすい。また、上手くのれたときにはスピードが出やすい。カーブにのりやすくなる反面、きれいにのることができないと、氷を削る（氷を削るときには音がなる）ため、スピードが落ちる、または生かせなくなる。浅い溝は、バランスが取りやすく、ターンがしやすくなる。

ホロウは、研磨のときに砥石の大きさを変えることで、選手好みのサイズへ変更することができる。

③ BLADE STYLE ブレード・スタイル（溝幅）

ブレード・スタイルは、トゥ（④に記載）からテール（ブレード最後方）までのエッジ間の幅の種類である。ブレード・スタイルには、Parallel（パラレル）、Tapered Side Honed（テーパード・サイド・ホンド）、Parabolic（パラボリック）がある。

- ・Parallel（パラレル）…トゥからテールまで同じ厚み。2本のエッジが平行（パラレル）である形。
- ・Tapered Side Honed（テーパード・サイド・ホンド）…「テーパード」は、「先細り」という意味であり、先端のトゥあたりが分厚く、テールに行くにつれて薄くなっていく形。
- ・Parabolic（パラボリック）…ブレードの支柱の外側部分（前方の支柱からトゥ、後方の支柱からテール）が分厚く、2本の支柱の間（ブレードの中央部分）がえぐれて薄くなった形。

基本形はパラレルである。バランスが取りやすい。またブレードは厚い方が丈夫であり、細いものの方が折れやすい。また厚みと連動して、鋼製品を使う量が異なるため、多少ではあるが、厚い方が重くなり、細い方が軽くなる。

細いものの方が摩擦が減るため、スピードが出る。その分ターンに技術を要する。またジャンプの跳び上がりのタイミングがそれぞれ異なるため、ブレードの変更時はタイミングを合わせる必要がある。

④ Toe トゥ（トゥピック）

トゥとは、ブレードの先端にあるギザギザ部分のことである。ジャンプを跳ぶ、又はスピニンに入る際にトゥで引っかけることにより、技を行う。また、ジャンプで着氷する際にも、トゥを使用する。

ブレードにより、トゥの大きさと形が異なる。

